



八戸市での滞在を振り返るアーサー・デスプレッツさん(左)と
ケンザ・ネフティさん

八戸 八戸学院地域連携研究センター(福田弥夫センター長)は21日、八戸市美術館内の「八戸学院まちなかラボ」で公開講座を開いた。日本に滞在しているフランス人2人が、八戸市で過ごした6カ月間を振り返り、街の魅力やフランスとの違いについて語った。
(向屋敷明)

八学大受け入れ フランス人2人

景色や文化 八戸に刺激

滞在半年、魅力を回顧

八戸学院大は昨年12月から学生有志が国際交流プロジェクトに取り組んでおり、フランス人ボランティアのアーサー・デスプレッツさん(23)、ケンザ・ネフティさん(24)を受け入れ、市内の幼稚園や小中学校などで交流してもらったり、大学のプロジェクトに参加してもらったりしている。2人は今月中に滞りを終える。

講座では、2人が6カ月間の滞在を写真とともに振り返った。昨年12月に初めて八戸市を訪れた2人は、まず雪の多さに驚いたという。餅つきや銭湯など日本文化に親しんだほか、八戸えんぶりを鑑賞したり、種差

海岸や蕪嶋神社を訪問したりと、八戸ならではの景色や文化にも触れ、「八戸はすごくいい街」と笑顔を見せた。アーサーさんは、特に種差海岸が気に入ったといい、「冬の種差海岸は本当にびっくりした。海の近くに雪があるという景色はフランスにはない」と魅力を語った。また、ケンザさんは「フランス人にとって、八戸は田舎ではなく大きな街でも、フランスの都市に比べて若い人が少ないと感じる」と話した。参加者からは住んでみて感じた八戸の良さや、フランスと日本の教育や医療環境の違いについて質問が飛んだ。